

## 『葛藤』の先に

東京都

新渡戸文化学園

中学2年 後藤珂音

記憶にある限り、個人戦初タイトル。

地元小平市の市民大会に出場したときのこと。これほどうれしいものとは思わなかった。

表彰式で自分の名前が読み上げられたこと。自分だけの金メダル。家族や祖母が自分のことのように嬉しそうにしている顔。友人たちからの祝福の声。全てが特別に感じられた。開会式のあいさつで、来賓の方が、新渡戸稲造の話がされていた。自分の中学校に関する話だったから、今日は何かいいことがありそうな予感がした、と言えるのは、優勝した後のことだからかもしれないけれど。

この優勝は、私を苦しめている「葛藤」の成果かもしれない。

剣道は、五歳から始めて、今では生活の一部となっている。何事も続かない自分にとって、剣道だけは不思議と続けられている。今の私があるのは、多くの仲間やライバルがいたからだと思う。そして、家族や親戚に剣道経験者が多い、いわゆる剣道一家であることも私が剣道を大事にしてこれた理由だと考えている。

すでに十年くらい剣道を続けているから、とても多くの先生から指導を受けてきた。そもそも、普段の生活で、まわりには「先生」みたいな大人に囲まれているから、剣道の話ばかりだ。だから、剣道というものは、技術の上達だけでなく、礼儀の正しさや他者への思いやりなどが大事であることは、よく理解しているつもりだ。先生方からは、人として大事なことについて、何より厳しく指導された。

また、技についても、多くの先生方に様々な指導をしていただいていた。小学生までは、大会に出場する機会が少なかったからかもしれないけれど、試合に勝つ事を褒められるよりも、「珂音の剣道は基本ができているね。」、「ま

っすぐな良い剣道だね。」と、剣道の基本に関して、たくさんの先生や先輩などから褒められることにやりがいを感じていた。剣道は、メン、コテ、ドウしかないのに、なんで先生によって言うことが違うのか戸惑うことは多かったけれど、そういうものだと思って、自分なりに考えて技を磨いてきたつもりだ。

中学生になると、そう言われていられなくなった。相手の技のスピードが違う。打突の重さが違う。声の迫力が違う。そして、体格も違う。圧倒されて、試合中に足は止まり、打つことさえできず、当然のように試合に勝つことは難しい日々が続いた。

中学校では、先生の指導も、小学校のころとは違うものだった。試合に勝つにはこんな指導をするのか。全ての指導が目からうろこだった。毎日が必死だったけれど、先生の指導を信頼して、この稽古を乗り切れば、自分も勝てるようになるかと信じて、剣道に集中してきた。

しかし、私は、ふと不安になった。これまで、打ち方がきれいだと褒められてきたのに、例えば、速さにこだわった打ち方をすることで、自分が変わってしまうのではないかと。そもそも、速さを重視すると、正確な打ちができなくなってしまっているのではないかと。過去には、そう指導されたこともある。先生の指導は分かりやすいし、全てが大切であることは理解できるけれど、これまでの私ではなくなってしまっているのではないかと。

ある日、思い切って、私の不安を先生にぶつけてみた。すると、「先生の指導は参考としなさい。最終的に何を選ぶかは自分だ」と。先生のアドバイスを聞いて、何か解決したわけではないけれど、たしかに私の中で何かが変わった。初優勝したのはその矢先である。

市民大会で金メダルをもらって、気が付いたことがある。特に、口に出したことも、何か書いたこともないけれど、実は、個人戦で優勝することが目標だったかもしれない。

母親から聞いたところでは、私が抱えているモヤモヤしたものを「葛藤」というらしい。この葛藤は、私にとって成長の機会だったような気がする。剣道に対する自分の考えや向き合い方について深く考えるきっかけになった。今までは、学校で褒められるポイントと道場で褒められるポイントが違っていただけから、稽古場によって打ち方を変えるような、信念のないようなこともしていた。これからは違う。自分の信念、考えを貫く強さを持つようになったのではないかと。

いかと感じる。

それに、先生から勝つことの喜びと大切さを強調されることが嫌だったけれど、やっぱり優勝はうれしい。地元の後輩や、幼いめいも、私を見る目が変わったのが分かる。なんだか、もっと稽古がしたい気持ちになってきた。

おそらく、先生が私に伝えたかったことが分かった気がする。

そして、おそらく、この葛藤を通じ得られたことの全てが「武士道」なのであろう。

そう私は信じている。